

## 原 著

## 絵本読み場面における幼児の情動認知の発達

磯 部 陽 子\* ・池 田 由 紀 江\*\*

本研究では、1歳から3歳の幼児を対象として「泣き（悲しみ）」「怒り」の情動を盛り込んだ絵本を用いて、登場人物という架空の他者についてどのように情動認知を行うか検討した。対象児の反応を非言語反応（表情表出、表情の模倣）と言語反応（確認・命名、叙述的発話）に分けて発達的特徴を分析した。その結果、表情表出、及び叙述的発話数は年齢の上昇に伴って多く認められるようになり、叙述的発話においては共感を示す発話が増えた。また、情動の種類は「怒り」と比べ、「泣き」の情動は1歳代から理解しやすいと考えられた。男女差は認められなかった。

キー・ワード：情動認知 表情表出 絵本読み場面

## I. はじめに

顔に表出された情動の認知能力は状況の客観的特徴と人がどのような思考をするかについて区別する能力が必要であり(Harris, 1989<sup>9)</sup>、他者の表情からその人の気持ちを読み取るには相当の認知能力が必要である。同時に、Stewart and Singh (1995<sup>12)</sup>らが指摘するように情動認知能力は複雑な対人関係のやり取りに必要な重要なソーシャルスキルであるという見解で一致している。さらに、益谷(1993<sup>13)</sup>によれば、情動認知は概念的な認知の問題にとどまらず、その後の共感や思いやり、ひいては道徳性や倫理観の発達とも深く結びついているとし、情動認知能力における初期からの発達の意味を示唆している。

Klinnert, Campos, Sorce, Emde, and Svejda (1983<sup>7)</sup>)によれば、他者の情動にかかわる経験を表情から推測できるようになるのは、2歳頃とされている。そして、2歳代では他者の情動を変えようといった意図的な試みの出現や

(Meerum Terwogt & Harris, 1995<sup>9)</sup>、情動にかかわる言葉を用い始めるという報告もある(Bretherton & Beeghly, 1982<sup>11)</sup>)。その後、3歳では、少なくとも6種類の個別の情動が生起する一般的な状況、もしくは表情から出来事はどのような意味を持っているのかが認知できるとされている(Russell, 1989<sup>10)</sup>)。しかしながら、益谷(1993<sup>13)</sup>)も指摘しているように、これまでの表情の発達の研究においては、出生後何歳ぐらいから表情の区別がつくようになるのか、またその能力に個人差がどれくらいあるのか、といった疑問や、情動の種類によって情動認知のしやすさに違いがあるのかといった点について、明らかにした研究は数少ない。そのため、情動認知の初期段階について発達的特徴が十分に明らかにされておらず、乳児から低年齢幼児を対象とした情動認知に関する研究が求められているといえよう。

ところで、言語発達が未熟である低年齢幼児に対して情動認知研究を行うには、言語反応だけでなく、表情など、非言語反応をも含めて情動的反応を取り出す方法が必要である。このことから、近年の低年齢幼児を対象とした情動認

\* 筑波大学教育研究科

\*\* 筑波大学心身障害学系

知に関する研究では、同一場面における継続的な幼児の反応、そして表情や模倣などの情動的反応をも引き出せる絵本を用いて研究が行われている。古屋・高野・伊藤・市川(2000<sup>3)</sup>)は、絵本の登場人物という架空の他者について、低年齢段階である1歳代約1年間を通して、幼児がいくつかの情動を理解していく発達的変化を検討した。その結果、1歳代であっても幼児は発達に伴い、登場人物の情動について因果的状況を踏まえた代理的情動反応を示すこと、認知的理解が進むことを示唆している。古屋ら(2000<sup>3)</sup>)の研究は、1歳代という低年齢幼児を対象として、情動認知の初期的な発達段階を検討した研究として意義深いと思われる。しかし、1歳代数名の1年間という短期間の縦断的研究であり、よりいっそう情動認知が可能となりはじめる2歳から3歳にかけての絵本場面での情動認知の発達的変化は検討されていない。また、古屋ら(2000<sup>3)</sup>)の実験では、読み聞かせを行ったのが対象児の母親であったため、個々の母親によって絵本読み聞かせ方や母親自身の表情表出などが異なっていたと推測され、実験条件が十分に統制されていたとはいえない。1歳代にとどまらず、1歳から3歳と、より対象年齢を拡大して絵本場面を用いた情動認知の実験研究を行うことは、これまで十分に明らかになっていない初期段階における情動認知の発達メカニズムを解明することにつながると思われる。

そこで、本研究では1歳代から3歳代の幼児を対象とした横断的研究を実施し、初期の情動認知の発達の特徴について明らかにする。具体的には、低年齢幼児の情動的反応を導きだしやすいとされている絵本を用いて、実験条件を統制するために、実験者自身が読み聞かせを行う。そして、絵本の登場人物という架空の他者について実験者が読み聞かせる中、幼児がどのようにその情動を受けとめ、認知していくのか、さらに情動の種類、性差による違いがあるのかを検討する。

## II. 方法

### 1. 対象児

対象児はI県内の保育園に通う幼児69名(1歳児21名、2歳児23名、3歳児25名)であった。すべての対象児には知的障害その他の障害はないことが確認されている。対象児の平均生活年齢、性別はTable 1の通りである。

Table 1 対象児の生活年齢、性別、人数

	生活年齢	1歳代	2歳代	3歳代
平均生活年齢		1歳8ヶ月	2歳5ヶ月	3歳5ヶ月
男女人数比(男/女)		11/10	14/9	14/11
全人数		21	23	25

### 2. 材料

古屋(2000<sup>3)</sup>)を参考に作成した表情を強調した絵本(泣き絵本、怒り絵本)の2冊を独自に作成し、使用した(Fig.1,2参照:なお、絵本は子どもになじみのあるキャラクターを使用しており、実際の絵本読み場面では実際のキャラクター名を使用した)が、論文中にキャラクター名

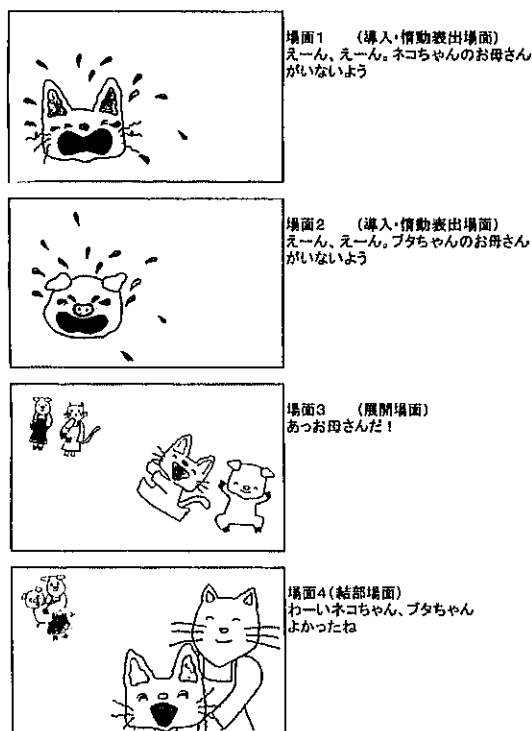


Fig. 1 泣き絵本

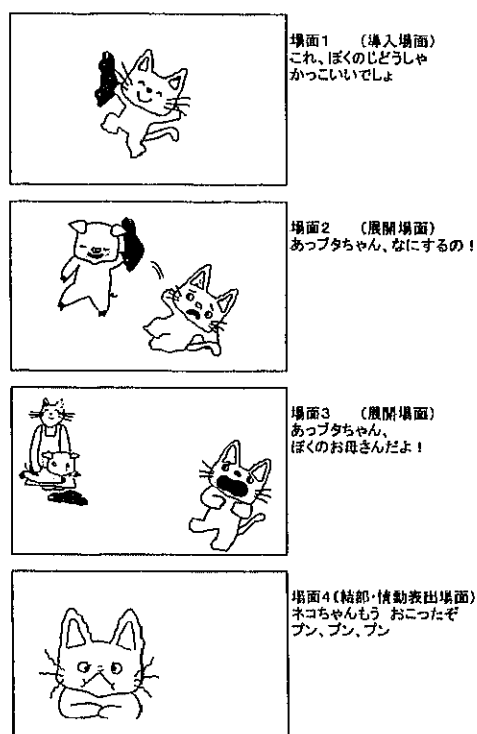


Fig. 2 怒り絵本

を使用することは不適当であるため、登場人物を「ネコちゃん」と記した)ストーリーは登場人物への共感を引き起こしやすいと思われる場面(導入・展開・結部情動表出場面)を設定した。

### 3. 手続き

観察は2001年7月に実施した。各保育園の個室で個別に(実験者と対象児1名ずつ)絵本読み聞かせを行い、VTRに録画した。材料の絵本は観察時のみ見ることとし、実験を始める前に30秒程度くすぐり遊びや会話を交え、その後2冊の絵本読みを行うようにした。絵本への取りかかりや読む順番は、対象児の希望がない限りはランダムに行った。絵本読みは各絵本一回のみとした。実験者は事前に保育園にて対象児らと十分に接する機会を持ったため、人見知りを示すようなことはなかったと考えられる。1試行1分程度であった。実験者が全員のデータに対して行った評定に加えて、評定の信頼性のチェックを行った。本研究の仮説について知ら

されていない障害児教育専攻の大学院生1名の評定者に、全てのデータにカテゴリ分析の評定をさせた。評定者との各カテゴリにおける一致率は、泣き絵本における「表情表出」では87.0%、「表情の模倣」では92.0%、「確認・命名」では100%、「叙述的発話」の表出98.0%であった。怒り絵本における一致率は「表情表出」では87.0%、「表情の模倣」では88.0%、「確認・命名」では100%、「叙述的発話」の表出では100%であった。不一致点については協議の後、カテゴリ決定した。

### 4. 分析の指標

VTR録画を再生し、物語に関する幼児の全ての発話、発声、行動を文字化した。

### 5. 子どもの反応カテゴリ

材料絵本2冊について古屋ら(2000<sup>9)</sup>)を参考にTable 2のように分類した。「非言語反応」としては各場面ごとに、読み聞かせ中の無意識的な「表情表出」、「表情表出」以外の登場人物に関する「表情の模倣」を設定した。もう一方で、登場人物に関する「言語反応」を取り出した。「非言語反応」の3カテゴリについては、同一場面での同一カテゴリであっても、子どもの反応内容が異なることがある。そこでTable 2に示すとおり、下位カテゴリを設定した。

「非言語反応」である「表情表出」と「表情の模倣」についてであるが、思わず子どもの表情が変わるものと、実験者の表情模倣が介在して子どもが自覚的に表情模倣を行ったものという点が異なっている。

まず、「表情表出」についてはIzard and Dougherty (1982<sup>9)</sup>)、首藤(1985<sup>11)</sup>)を参考にし、大まかな顔全体の表情変化を手がかりとして場面ごとに分析した。場面により、典型的な代理的情動反応となる表情表出は異なる。絵本読み開始前から笑顔で、そのまま導入部に入った場合は、場面によって笑顔が引き起こされたものではないと考え、「表情表出」にカウントしないこととした。

次に、「表情の模倣」については、第3者から

Table 2 表情及び行動、発話の 카테고리

非言語反応		
a 表情表出		
泣き絵本	〈導入・情動表出場面〉 苦悩、泣きそうな表情 直接実験者に向かって不快を示す	〈展開・結部場面〉 笑顔、厳しい表情のなごみ
怒り絵本	〈導入場面〉 笑顔 〈展開場面〉 不快そうな表情、発声、笑顔の消失 笑顔	〈結部・情動表出場面〉 不快そうな表情、発声 直接実験者に向かって不快を示す
b 表情の模倣		
泣き絵本	〈情動表出場面〉 正しい模倣 悲しみの定型的表現として受け入れられるもの	形だけの模倣 手を部分的に顔に当てるだけ 笑顔でえんえんという
怒り絵本	むっとした顔、怒ったような声での表現	笑顔でブンブンという 表情の変化はなく、首を振ったり、口をつまんだりする
言語反応		
c 確認・命名 発声、発語、指さしによる、人物やものの確認、命名		
d 叙事的発話		
(コメント)	登場人物の行動や状況の叙述、質問	例 ニャンニャンえんえん いたーとっちゃんたのプープ おこったの
(気持ち)	登場人物の気持ちの説明	例 あたしのがあってありがたう
(非難)	登場人物への非難	例 あーあ、あーあ メッた
(他)	絵本に関わるがストーリーに関与しない発話	例 怒った顔を見て「こわい」という

見て「泣き、悲しみ」「怒り」の情動表現として受け入れられるもの（悲しみの表情でエンエンと言う等）と受け入れられないもの（例えば泣きまねでありながら笑顔である等）とに分け、前者を「正しい模倣」、後者を「形だけの模倣」とした。また「表情の模倣」は情動状態を表す言葉（えん、えん、ブン、ブン）を伴うことがあり、その際にはこれらの言葉は「言語反応」には含めず、「表情の模倣」としてカウントした。ただし前後の文脈、模倣動作の有無から登場人物の行動を描写したと判断できる場合は「言語反応」とした。

最後に、「言語反応」は、発声、発語、指さしによる人物やものの「確認・命名」とラベリング以外で物語の内容に言及する「叙事的発話」に分けた。実験者からの問いかけに「うん」と返答するだけの言語はカウントしないこととした。さらに「叙事的発話」については、登場人物の行動や状況の叙述を「コメント」、物語中にない新たな情動情報を含む表現を「気持ち」「非難」として取り出した。絵本に関わるがストーリーに関与しない発話は「他」とした。絵本の内容に直接関わらない行動、発話（本をゆらすとうれしそうに笑う、本をめくる、本の絵を触る、別の本のことを質問する、そばにあるおも

ちゃに気をとられる等）は分析から除外した。

子どもの反応の出現頻度については各場面ごとに1回の、最初に出現した反応のみを取り上げることとし、叙事的発話の発話内容については、全発話を取り上げることとした。

### III. 結果

幼児の反応の出現頻度をカテゴリーに応じて結果を示した。「言語反応」における叙事的発話については頻度ではなく、全発話を記述した。また、複数回の表情の模倣が出現した場合、「正しい模倣」を「形だけの模倣」に優先させて結果の表に記した。

#### 1. 情動認知と年齢との関連

##### 1) 表情表出：

###### (a)泣き絵本

泣き絵本における「表情表出」出現率の結果をFig.3に示した。導入・情動表出場で表情の種類に関わらず『何らかの情動表出』をした出現率は1歳から3歳代にかけて23.8%から52.0%へと年齢と共に増加した。なお、表出された表情の種類による結果は、『苦悩の表情』では全年齢で横ばい傾向であった。『実験者への不快』は全年齢において出現しなかった。主人公が泣いている場面でありながら『笑顔』の出現

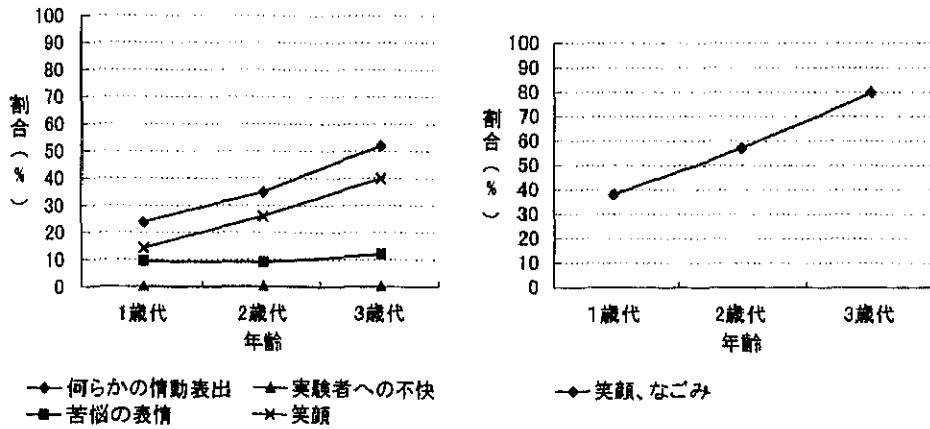


Fig. 3 泣き絵本; 導入・情動表出場面(左)および展開・結部場面(右)

も見られ、出現率は年齢と共に14.3%から40.0%へと増加した。次に同じく泣き絵本における展開・結部場面では『笑顔、なごみ』の表出が1歳代38.0%、2歳代57.0%、3歳代80.0%と年齢と共に大きく増加した。泣き絵本においては情動表出場面よりもストーリー展開のある場面において子どもたちの表情の変化が現れた。

泣き絵本における導入・情動表出場面と展開・結部場面におけるそれぞれの「表情表出」が認められた人数について、年齢による変化を検討するために、場面ごとに反応の認められた人数を1歳から3歳ごとに集計した。そして、人数の偏りを $\chi^2$ 検定により検討した結果、展開・結部の『笑顔、なごみ』のみ人数の偏りが有意であった( $\chi^2(2)=8.43, p<.01$ )。そこで、残差分析を行った結果、1歳から3歳にかけて『笑顔、なごみ』が増えることが明らかとなった。従って、泣き絵本では、展開・結部で1歳から3歳にかけて『笑顔、なごみ』の反応が増加することが示唆された。

#### (b) 怒り絵本

怒り絵本における「表情表出」出現率の結果をFig.4に示した。導入場面での『笑顔』出現率は1歳代から3歳代にかけて19.0%から48.0%へと年齢と共に増加した。怒り絵本、展開場面における『何らかの情動表出』出現率は、

1歳代から3歳代にかけて19.0%から64.0%と年齢と共に増加した。『不快の表情』は1歳代では出現せず、2歳代が26.0%と最も高く、3歳代20.0%をやや上回った。その反面、『笑顔』の出現は2歳代で4.0%と最も低く、1歳代が19.0%、3歳代が44.0%であった。怒り絵本、結部・情動表出場面では『何らかの情動表出』出現率は1歳代33.0%、2歳代が34.0%と横ばい傾向の中、3歳代では72.0%と非常に高かった。この結果は『笑顔』表出の出現率において3歳代が他年齢と比べて特に高い結果を示したためである。『笑顔』の出現率は1歳代14.0%、2歳代30.0%、そして、3歳代は64.0%であった。『不快の表情』は全年齢でほぼ横ばい傾向であった。『実験者への不快』は2歳代、3歳代には全く表出されず、1歳代のみ表出であり、出現率は9.5%であった。

怒り絵本における導入場面、展開場面、結部・情動表出場面におけるそれぞれの「表情表出」が認められた人数について、年齢による変化を検討するために、場面ごとに反応が認められた人数を1歳から3歳ごとに集計した。そして、人数の偏りを $\chi^2$ 検定により検討した結果、展開場面の『何らかの情動表出』で人数の偏りが有意であり( $\chi^2(2)=10.78, p<.01$ )、結部・情動表出場面の『何らかの情動表出』で人数の偏りが有意で( $\chi^2(2)=9.19, p<.05$ )、同じく結部・

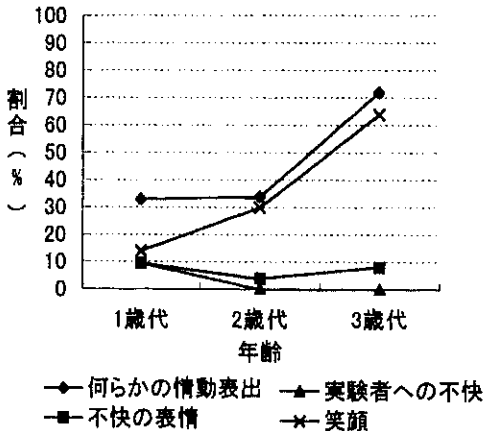
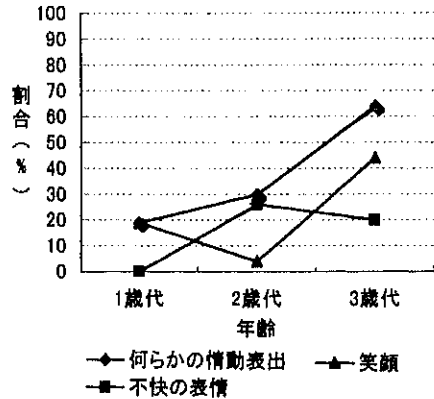
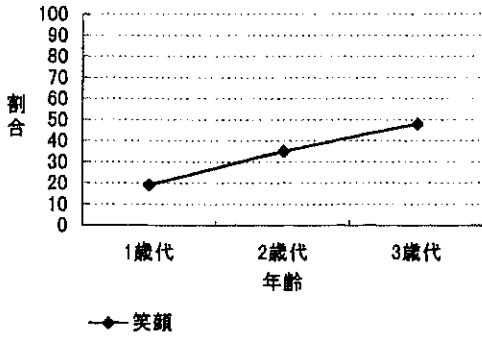


Fig. 4 怒り絵本；導入場面(上)，展開場面(中)，結部・情動表出場面(下)

情動表出場面の『笑顔』でも人数の偏りが有意であった ( $\chi^2(2)=12.78, p<.01$ )。残差分析を行った結果、これら全て2歳から3歳にかけて反応が増加することが明らかとなった。したがって、怒り絵本においては、展開場面と結部・情動表出場面の『何らかの情動表出』と結部・情動表出場面における『笑顔』が2歳から3歳

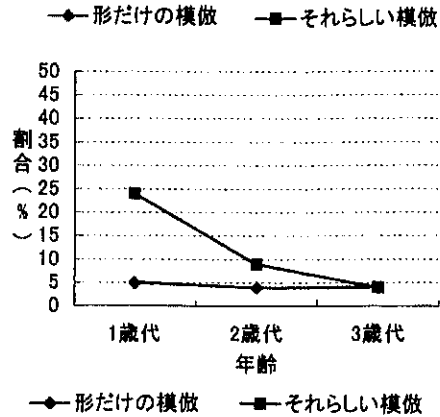
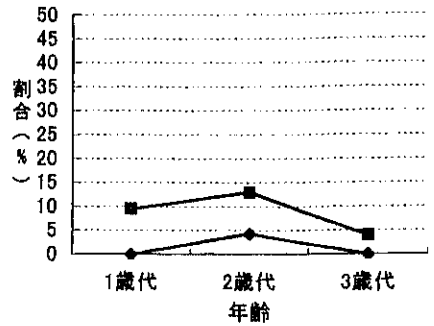


Fig. 5 泣き模倣出現率(上)および怒り模倣出現率(下)

にかけて増加することが示唆された。

2) 情動表出場面における表情の模倣：泣き、怒り絵本の情動表出場面における「表情の模倣」出現率は Fig.5 の通りである。

#### (a)泣き絵本

泣き絵本における泣き模倣の出現率は、『正しい模倣』の出現率は1歳代9.5%、2歳代13.0%、3歳代4.0%とほぼ横ばい傾向であり、『形だけの模倣』においては2歳代のみ4.3%出現したものの、他年齢幼児では出現が認められなかった。泣き絵本において、『正しい模倣』及び『形だけの模倣』が出現した人数について、各年齢による変化を検討するために、1歳から3歳ごとに集計した。そして、それら人数の偏りを $\chi^2$ 検定により検討した結果、いずれも有意でなかった。

#### (b)怒り絵本

怒り絵本における怒り模倣の出現率は『正し

い模倣』ではほぼ変わらず、『それらしい模倣』では年齢の上昇に反し、出現率は1歳代から3歳代で24.0%から4.0%と下がった。怒り絵本についても、泣き絵本と同様に年齢ごとに集計を行い、 $\chi^2$ 検定を行ったが、いずれも有意ではなかった。

3) 言語反応：発声、発話、指差しのみによる物語についての「確認・命名」は、泣き絵本、怒り絵本共に2歳代で最も多く出現した。泣き絵本においては1歳代38.0%、2歳代74.0%、3歳代52.0%と2歳代が特に多く、怒り絵本でも1歳代38.0%、2歳代57.0%、3歳代48.0%との結果であった。

「確認・命名」が認められた人数について、年齢による変化を検討するために、1歳から3歳ごとに集計した。そして、それら人数の偏りを $\chi^2$ 検定により検討した結果、人数の偏りは有意ではなかった。従って、「確認・命名」は年齢による違いはないことが示唆された。

「叙述的発話」における全発話は Table 3 に示した通りである。その結果、叙述的発話の発話数は泣き絵本では1歳代24.0%、2歳代43.0%、3歳代44.0%、怒り絵本では1歳代10.0%、2歳代35.0%、3歳代44.0%と両絵本とも年齢の上昇とともに増加した。「叙述的発話」の内容であるが、1歳代においては1歳10ヶ月児1名が泣き絵本において『気持ち』の発話が見られた他は、泣き、怒り両絵本において登場人物の行動や状況を説明する『コメント』がほとんどであった。2歳代において泣き絵本では「良かった」などの『気持ち』の発話が増加し、「泣いてる」、「エーンエーンになっとる」など情動状態を表す言葉を交えた説明も見られた。2歳代では怒り絵本において1名のみ『非難』が見られた。3歳代では「泣き絵本」において『気持ち』の発話が全年齢中最も多く(3幼児)見られ、同じく3歳代の怒り絵本では『非難』の発話が全年齢中最も多く見られた。

Table 3 叙述的発話

性別	年齢	泣き絵本	怒り絵本
M	1・4	いだー！(お母さんを指差して)	あー！ワンワンだ！ワンワンワン(ノタンを指差して)
F	1・5	あっ！(お母さんを指差して)	—
M	1・7	あっ！(お母さんを見つけて)	—
F	1・7	—	あつがたら(プタちゃん)とつたつた(とつちやつた)
F	1・8	おしまい	—
F	1・10	かった(良かった)	—
F	2・2	のんたんがいた・いた！(お母さんが)	—
F	2・3	いたっ！良かったね。気持ち	かっこいい
M	2・3	いた？いたよ。	かっこいいね・プタちゃん！(プタちゃんが車をとった時)
M	2・3	—	あーあ(車を取った場面)非難
F	2・5	—	いいね(車を見て)
M	2・5	泣いてるの？(のんたんが)・いないの？(プタちゃんの お母さんが)・いた！(お母さんが)・おしまい！	とつちやつたの？(車を)・お母さんとつちやつたの ・怒ったの？かわいいそうね(本を触る動作) 気持ち
M	2・6	あつた！(お母さんを指差して)・良かった 気持ち	—
M	2・6	お母さん(見つけたのを見て)	—
F	2・9	いない(プタちゃんのお母さんが)	—
F	2・9	いた(お母さんが)・良かった 気持ち	かっこいい(車が)
F	2・9	—	あー(プタちゃんがお母さんもとつた時)非難
M	2・10	あれ、エーンエーンになっとるわ(のんたんを見て) ・いないの？(のんたんのお母さんが)・いないの(プタ ちゃんのお母さんが)・いた！いたよ。	赤い車だ！・とつちやつたの？(車を)・怒ってる(のんたんが)
M	2・11	のんたんだ	かっこよくない(車に対して)・とつちやつた(車を)
F	3・0	おかあ、好きね 気持ち	いい(車が)
M	3・1	いないの、そう。のんたんのお母さんがいない？ お母さんだー！	うん、かっこいい。 とつちやつたよ(車を) あれあれ、とつちやつたよ(お母さんを)非難 プンプン・怒ったよ
F	3・1	いた？	いい(車が)
F	3・1	いた	ブーブー(車)とつちやつた
F	3・1	よかった 気持ち	ブーブー、ブーブーら(車を指差して)
M	3・2	いるよお母さんそこに	かっこいい
F	3・2	いないねえ・いた！	かっこいい
M	3・2	今度はプタちゃん、あつ泣いちゃった 泣いちゃった。泣いてる泣いてる(近くののんたんを見て) あ、プタちゃん泣いてる。いたぞつちに！(お母さんが)	かっこいい！あつブーブーら、プタちゃんプタちゃんプタちゃん(車をとった時) あ自動車持つてるよー！(ぶたちゃんが)非難
M	3・3	いた	とつちやつた(自動車？)
F	3・10	いたよ	とつちやつた(自動車を)
F	3・11	買った物いつたの？・良かった 気持ち	ぶたちゃんひどいんだね(自動車をとった時)非難

—は当該カテゴリが出現していないことを示す。

「叙述的発話」が認められた人数について、年齢による変化を検討するために、1歳から3歳ごとに集計した。そして、それら人数の偏りを $\chi^2$ 検定により検討した結果、怒り絵本において「叙述的発話数」が増加していた( $\chi^2(2) = 7.08, p < .05$ )。残差分析の結果、1歳から2歳にかけて「叙述的発話数」が増加していることが明らかとなった。

## 2. 情動認知と性別との関連

### 1) 表情表出:

#### (a) 泣き絵本

泣き絵本における導入・情動表出場面では『苦悩の表情』は男児8.0%、女児13.0%とほとんど差がなく、『笑顔』でも男児30.0%、女児23.0%で、大きな差は認められなかった。展開・結部場面での『笑顔、なごみ』の表出も男児56.0%、女児63.0%と男女比にほとんど差がなく、泣き絵本における表情表出には、性別による差は認められなかった。泣き絵本場面の「表情変化」について、性別の差を検討するために、反応の認められた人数を集計して、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、性別により人数の偏りは認められず、泣き絵本での表情表出は、統計学的にも性別で違いはないことが示された。

#### (b) 怒り絵本

怒り絵本における導入場面では『笑顔』の表出が男児で44.0%に対し女児23.0%と、男児の表出が半数近く多かった。展開場面における『不快の表情』においては男児が21.0%に対し女子が10.0%の表出と、男児の『不快の表情』出現率が女児のそれを倍以上上回る中、同じ展開場面において女児は『笑顔』の表出が30.0%と男児の18.0%を上回った。結部・情動表出場面では『不快の表情』において男児54.0%、女児40.0%と男児が女児を上回った。同じく結部・情動表出場面の「実験者への不快」においては男児が5.0%に対し女児0%と、どちらの表出も少なかった。さらに、『笑顔』の出現率は男児40.0%、女児33.0%と大差がなかった。

なお、怒り絵本の「表情表出」について、性別の差を検討するために、反応のあった人数を

集計して、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、全ての場面と反応において性別による人数の偏りは認められず、怒り絵本での表情表出は、統計学的にも性別で違いはないことが示された。

2) 情動表出場面における表情の模倣: 泣き絵本における泣き模倣(『正しい模倣』と『形だけの模倣』を含む)では、『正しい模倣』及び『形だけの模倣』両模倣において、性別による差はほとんど差が認められず、怒り絵本における怒り模倣でも、『正しい模倣』『形だけの模倣』共に、性別による差はほとんど認められなかった。これら表情模倣についても、性別の違いを検討するために $\chi^2$ 検定を行ったが、人数の偏りは認められなかった。よって、情動表出場面における表情の模倣について、統計学的にも性別による違いはないことが示唆された。

3) 言語反応: 『確認・命名』においては泣き絵本において男児56.0%、女児53.0%、怒り絵本において男児49.0%、女児47.0%と、双方、男女比はほぼ変わらない結果を示した。「叙述的発話」発話数の男女比も変わらなかった。これら言語反応についても、性別の違いを検討するために $\chi^2$ 検定を行ったが、人数の偏りは認められなかった。従って、言語反応に関して、統計学的にも性別による違いはないことが示唆された。

## IV. 考察

### 1. 情動認知と年齢との関連

1歳代から3歳代における非言語反応である「表情表出」「表情の模倣」、言語反応である「確認・命名」「叙述的発話」の出現率、出現発話内容を分析した。

まず、「表情表出」において、1歳代であっても泣き絵本、怒り絵本の両絵本における情動表出場面では2、3歳児とほぼ同率の『苦悩の表情』、『不快の表情』を示した。このことは1歳代から絵本の登場人物に対して代理的情動反応を示し、また登場人物への認知的理解が進むという先行研究の結果を支持するものと考えられる。さらに、情動表出場面における「表情の模



傲」において1歳代では先行研究の結果と同様に、泣き絵本では多くが『正しい模倣』であることから、1歳児はその表現に結びついた悲しみの情動に気づいていることが分かる。また、古屋ら(2000<sup>9)</sup>)の先行研究においては怒り絵本では怒りの情動に1歳児が着目することは少なく、『形だけの模倣』に留まるといった結果が示されていたが、本研究では怒り模倣は『形だけの模倣』、『正しい模倣』共に非常に高く、本研究の結果から1歳代であっても幼児は怒りの情動自体に関心を持ち、怒りの情動に気づき始めていると考えられる。

一方、ストーリーの展開する場面である泣き絵本(展開・結部場面)怒り絵本(展開場面)では1歳代では泣き絵本のストーリーの展開場面での『笑顔』の表出は見られたものの、怒り絵本のストーリー展開場面では『不快の表情』は全く現れなかったことから、怒り絵本自体の展開は理解できなかった、つまり、怒りの情動を盛り込んだ絵本の認知は泣きの情動を盛り込んだ絵本に比べて、1歳児では絵本の内容の理解に難しさがあったのではないかと考えられる。

「言語反応」では1歳代では泣き、怒り絵本どちらの絵本にも38.0%もの『確認・命名』が見られており、さらに最も早い幼児で1歳4ヶ月児から単なる登場人物へのラベリングを超え、物語の内容に言及しはじめている(『叙述的発話』)。「叙述的発話」は『確認・命名』とは異なり、物語の因果的理解と子どもの言語発達の2要因があって生じるものであり、年齢の影響を受けやすい項目であると考えられる。結果、上述した、ストーリー展開場面での結果である怒りの情動の方が泣きの情動に比べて難しいという結果と同様に、泣き絵本における叙述的発話数は24.0%と、怒り絵本の10.0%を上回っており、泣きの情動の方が1歳代幼児にとって認知しやすい情動であると考えられる。さらに両絵本における「叙述的発話」の内容であるが、泣き絵本では1歳代では登場人物の行動や状況を叙述した『コメント』が多く、登場人物の『気

持ち』を直接的に表現する発話はほとんどなかった。怒り絵本においても『コメント』2発話のみであった。古屋ら(2000<sup>9)</sup>)の記述によると『コメント』は子どもが登場人物に対する認知的理解を行っていることを示すとされ、このような認知的理解が情動認知を進める可能性がある。

2歳代になると、泣き絵本および怒り絵本共に、場面ごとの全情動表出の出現率は増加した。ただし、反応カテゴリー毎に見ると、怒り絵本の展開場面において、『不快の表情』が3年中最も高かった。この場面はブタちゃんがネコちゃんのおモチャとお母さんをどちらも取り上げてしまうというストーリー展開場面であり、2歳代ではこの場面を認知的に理解しており、また、この場面が特に2歳代幼児にとって不快の情動と結びついていたのではないかと考えられる。

言語反応においては2歳代では泣き絵本に74.0%、怒り絵本に57.0%もの『確認・命名』をしており、物語への関心が非常に高いことが伺える。また、統計学的にも1歳から2歳にかけて怒り絵本の叙述的発話数が増加していた。これは24ヶ月児でコメントだけでない説明の発話も増えるというDunn, Bretherton, and Munn(1987<sup>2)</sup>)の報告とも一致している。特に泣き絵本では主人公の嬉しい『気持ち』を表現する発話が多く見られた。また、「泣く」「えんえんになってる」といった情動を直接表す言葉の表出が見られた。2歳代の怒り絵本においても「怒る」という心的状態語の表出が見られた。これは2歳までに情動状態を表すことばを使うようになるという先行研究(Bretherton & Beeghly, 1982<sup>1)</sup>)とも一致する。また、1歳代では見られなかった、ブタちゃんに対する『非難』の発話が1歳児に見られた。さらに、2歳代の幼児(2歳5ヶ月)においてお母さんを取られたネコちゃんに対し「かわいそうにね」と言って本をなでる様子が見られた。直接登場人物に同情する発話をし、慰めようとする幼児は全対象児の中でこの幼児のみに見られ、この様な行動が

年齢によるものか、個人差に寄るものかは今後の研究を必要とすると思われる。

3歳代では泣き絵本、怒り絵本両物語の「叙述的発話」において登場人物の行動や状況の叙述、質問をあらわす『コメント』だけでなく、登場人物の『気持ち』の説明、登場人物への『非難』も増加した。叙述的発話は登場人物に関する幼児の情動認知を含めた物語への認知的理解を示すものである。3歳代では特に怒り絵本における『非難』が多く出現され、このことはブタちゃんが主人公とのやり取りにおいて非難されるべき存在であることを理解していると考えられる。

ところで『非難』の増加だけでなく、泣き、怒りの場面でありながら登場人物の情動（情動表出場面）への注目より、登場人物のやりとりの楽しさなど、絵本の展開（展開場面）に注目する幼児も年齢と共に増加し、3歳で最も高かった。これは年齢と共に絵本の認知的理解が進み、客観的に楽しむことが出来るようになったからであろうと考えられる。さらに年齢の上昇と共に、泣き、怒り両方の情動表出場面においては客観的に場面のコメントをしながらの『笑顔』の表出が高いという結果となった。統計学的分析の結果においても、「表情表出」では、泣き絵本では展開・結部場面において、1歳から3歳へ年齢が上昇すると共に『笑顔、なごみ』の反応が増加すること、および、怒り絵本では結部・情動表出場面における『笑顔』が2歳から3歳にかけて増加することが示唆されており、この結果からも、1歳代で見られた、登場人物に代理的情動反応を示すといった共感的反応だけでなく、年齢が高いほど、登場人物とのやりとりを距離をおいて楽しむといった反応が生じていると言えるだろう。この結果を自他の分化との関連からとらえる考え方がある。Hoffman (1984<sup>9)</sup>) は自他分化の発達と共感の関係を段階的にとらえ、1歳代を自己とは異なる身体的存在としての他者に気づくが、まだ内的状態は自分のそれを投射する傾向が強い時期、2、3歳頃から他者を自分とは独立した内的状態を持つ

ものとしてとらえ始める時期としている。つまり、怒り、泣きの場面でありながら、状況の説明をしながら笑顔を表出した3歳代は、絵本の読者として登場人物という架空の他者に関わっていたのではないかと考えられる。

ところで、全幼児において、「怒り絵本」の「叙述的発話」の分析から、ネコちゃんの自動車をブタちゃんに取られたことへの「叙述的発話」は認められるものの、ネコちゃんのお母さんをブタちゃんに取られたことへの「叙述的発話」が認められなかった。つまり、「怒り絵本」からは「自動車を取られた」ことは理解していても「お母さんを取られた」ことは理解していないことを示す結果が示された。この結果は1歳代幼児を対象とし、実験者が幼児らの母親である古屋ら (2000<sup>9)</sup>) の結果においても同様の傾向が認められている。「怒り絵本」では自動車を持って喜んでいる場面があり、自動車は3回登場するものの、母親の出現は1回であることなどから考えると、物語の構成そのものに、母親への共感的要素が少なかった可能性が指摘できるだろう。

## 2. 情動認知と性別との関連

「言語反応」においては男女差は統計学的には認められなかったが、「表情表出」においては怒り絵本においてのみ男女差がわずかに認められた。怒り絵本の導入場面でも統計学的に有意差はなかったが、『笑顔』の表出において男児が女児を上回っている。これは古屋ら (2000<sup>9)</sup>) の先行研究にも指摘されている様に、主人公が一般的に女児よりも男児が欲しがると思われる、おもちゃの自動車を持って喜んでいる様子であるため、男児に多く笑顔が見られたのであろう。また、怒り絵本のストーリー展開場面である、登場人物がブタちゃんに自分のおもちゃ、お母さんを取られるやり取りの場面では、男児が『不快の表情』を出すのに対し、女児は『笑顔』の表出が多かった。これは、導入場面で『笑顔』の表出も多く認められていることにも関連し、おもちゃの自動車を取られたことに対して男児が『不快の表情』を多く表出したのであろうと

考えられる。また、もう一方で、女兒が男児よりもほほえみなどの肯定的な表情レパートリーが豊かであるという報告(益谷, 1993<sup>8)</sup>)にも関連している可能性はある。

以上の点から考察すると、本研究では情動認知と性別の関連は認められなかったと言えるだろう。

## V. まとめ

1歳から3歳の幼児を対象として、怒り、泣きの情動を盛り込んだ絵本の、絵本読み場面における情動の認知について検討した。その結果、非言語反応では表情表出の出現率が、言語反応では叙述的発話の発話数が年齢の上昇にしたがって多く認められるようになり、叙述的発話においては共感を示す発話が増えた。また、情動の種類は「怒り」と比べ、「泣き」の情動は1歳代から理解しやすいと考えられた。情動認知と性別との関連においては、本研究においては男女差は認められなかった。

## 文 献

- 1) Bretherton, I. & Beeghly, M. (1983) Talking about internal states of mind: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906-921.
- 2) Dunn, J., Bretherton, I., & Munn, P. (1987) Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology*, 23, 132-139.
- 3) 古屋喜美代・高野久美子・伊藤良子・市川奈緒子 (2000) 絵本読み場面における1歳児の情動の表出と理解. *発達心理学研究*, 11, 23-33.
- 4) Harris, P. L. (1989) Children and emotion: The development of psychological understanding. Blackwell, Oxford.
- 5) Hoffman, M. L. (1984) Interaction of affect and cognition in empathy. In C. E. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc (Eds.), *Emotions, cognition, behavior* Cambridge University Press, Cambridge, 103-131.
- 6) Izard, C. E. & Dougherty, L. M. (1982) Two complementary systems for measuring facial expressions in infants and children. In C. E. Izard (Ed.), *Measuring emotions in infants and children* Cambridge University Press, Cambridge, 97-162.
- 7) Klinnert, M. D., Campos, J. J., Sorce, J. F., Emde, R. N., & Svejda, M. (1983) Emotion as behavior regulators: Social referencing in infancy. In R. Plutchik & H. Kellerman (Eds.), *Emotion: Theory, research and experience*. Academic Press, 57-86.
- 8) 益谷真 (1993a) 表情の個性の分析. *日本心理学会第57回大会発表論文集*, 662.
- 9) Meerum Terwogt, M. & Harris, P. L. (1995) Understanding of emotion. In M. Bennett, (Ed.) *The child as psychologist*. 二宮克美・渡辺弥生・首藤敏元訳 (1995) *子どもは心理学者—〈心の理論〉の発達心理学*. 福村出版.
- 10) Russell, J. A. (1989) Culture, scripts, and children's understanding of emotion. In C. Sarrni & P. L. Harris (Eds.), *Children's understanding of emotion*. Cambridge University Press, Cambridge, 293-318.
- 11) 首藤敏元 (1985) 児童の共感と愛他行動—情緒的共感の測定に関する探索的研究—. *教育心理学研究*, 33, 226-231.
- 12) Stewart, C. A. & Singh, N. N. (1995) Enhancing the recognition and production of facial expressions of emotion by children with mental retardation. *Research in Developmental Disabilities*, 16, 365-382.
- 13) 吉川佐紀子・益谷真・中村真編 (1993) *顔と心: 顔の心理学入門*. サイエンス社.

## **Development of Emotion Recognition of Picture Book Characters in Infants**

**Yoko ISOBE and Yukie IKEDA**

The purpose of this study is to investigate the way of recognition of the enhancement of emotion about fictitious characters who are illustrated in books by one to three year old infants, when these infants read illustrated books which contain the emotions of "crying (sorrow)" and "anger". The progressive features of reactions by the infant objects are analyzed, separated into non-linguistic reactions (change of expression and/or imitation of expression) and linguistic reactions (confirmation/naming and/or descriptive speech). The results are that the number of changes of expression and amount of descriptive speech increases according to the age, and speech indicating sympathy increases in descriptive speech. The emotion of crying is thought to be more easily recognized from the the age of one compared to the emotion of anger. Differences between boys and girls were not recognized in this study.

**Key Words:** emotion recognition, facial expression, illustrated books